

【第15回年次大会 シンポジウム：音楽の中にみるジェンダー意識の変容 要旨】

リフレインされる歌詞—ジェンダーの視点から

佐々木瑞枝

「家父長制」という言葉から我々はどんなことを想像するだろう。

「家長である父親によって支配される家族制度？ 今の日本ではすでに家父長制は消えつつあるのでは？」そう考える人も多いのではないだろうか。しかし、「家父長制」は過去の遺物ではなく、現代社会においてもさまざまな局面に息づいている。ここでは、歌謡曲のなにげない歌詞の一節に潜む「家父長制」について、2つの歌から考えてみた。

NHKの年末の祭典である「紅白歌合戦」に1968年以来46回も連続出場している森進一の大ヒット曲の一つは「おふくろさん」である。テレビ画面から流れる「おふくろさん」を聞きながら、切々と歌う男性歌手の背後に「母は偉い、自分にこう諭してくれた。母の言っていることは世の中の真理である、母の教えを守って「強く生きよう」というメッセージが流れていることを感じる。

しかし、リフレインされる歌詞には「世の中の傘」になり、「強く生きる」のは「男性として自然だし当然のこと」という考え方が隠されており、これは「家父長制」イデオロギーにほかならない。

「家父長制のもとでは、妻をはじめとする女性たちは、その字が示すように「家父長」にはなれない。それは個人として生きる道を閉ざされ自分自身で意思決定することができない、身体的にも精神的にも屈辱的な立場に身を置くことになる。性的差異が性的抑圧のイデオロギーの装置、あるいは文化の装置として働いており、女性はそれに従わざるを得ない立場にあった」（『日本語ジェンダー辞典』）。

この歌が発売されたのは1971年、日本の社会が高度成長（1954年から1973年）を遂げつつある最中である。「働く男」「男らしさ」が歓迎される時代背景がこの歌詞を生み出したとも言える。しかし、その後のバブル崩壊、男女雇用機会均等法の成立（1986年施行）、女性の社会進出と、日本の社会は刻々と変化していった。それにも拘わらず、森進一の歌う「おふくろさん」は40年以上も歌い継がれてきている。テレビで、コンサートで、カラオケで、宴会で、一体この歌はどのくらいの場で歌われてきているだろう。リフレインされた歌詞は、日本の社会や制度、習慣の中で生き残る力を持っているということになる。それだけこの歌には家族制度の「美德」イコール「真実」だと思わせる何かがある。

森進一とはほぼ同時代を生きてきた歌手に前川清がいる。1969年デビュー、それ以来現在まで活躍を続けているが、「噂の女」で彼の歌う女性像にも家父長制の中での「女のイメージ」が隠れている。

「噂の女」は1970年、内山田洋とクールファイブの歌として発売された。作詞は山口洋子である。女性が書く歌詞を男性たちが歌う。その女は「か弱く、男にすがって生きて行く」。なぜ、こうした歌がこれほど生きながらえるのか、一体日本の社会はどのような女性像を望んでいるのか、2014年、安倍内閣は「女性の更なる社会進出」を謳っているが、連日カラオケでは、こうしたステレオタイプの女性像がリフレインされている。

「女は男に甘えるもの」——女は強くなつてはいけない、男に甘えてこそ女である。

「男は女の願いなど聞かなくても良い」——なぜなら男は社会の中で生きているのだから。それ

でも、女はすがって男に頼るものである、という意味の歌詞が並んでいる。

この歌詞の中にも家父長制度を維持するためのシステムが内蔵されている。もちろん、作詞家も作曲家も歌手も、そしてそれをカラオケなどで歌う人も、それを聞く人もそのシステムには気づかない。しかし、システムの中であって大衆に支持されるからこそ、メディアにもどり、生き残ることができる。

リフレインされる歌詞は、社会の価値観の中で選ばれ、共有されているのだ。

テレビドラマで「女弁護士」や「科捜研の女」などと「女」をつけることで、その職域が男のものであることを暗に示していることと同様、歌謡曲で歌われる「男」「女」の背景には家父長制の隠れたシステムが働いている。

社会はこんなにも変化しているのに、社会道徳や価値観はそれほど変化していない、あるいはその当時の価値観を持つ人を対象にテレビ番組は企画され、その人たちが懐かしさを込めてカラオケで歌う。

歌謡曲の歌詞のように、男性中心的な制度の中での女性の役割を心理的に刷り込む「見えない戦略」は数十年間、成功してきたかに見える。しかし、今後はその戦略も時代の推移と共に姿を消して行き、かろうじて生き残るかどうか、そういう流れになっていくだろうか。そう望みたいものである。

[参考文献]

門倉正美 (1995) 「第6章：高度成長と社会の変化」『日本事情ハンドブック』大修館書店

佐々木瑞枝 (2009) 『日本語ジェンダー辞典』東京堂出版

佐々木瑞枝 (1995) 「第5章：社会と性差」『日本事情ハンドブック』大修館書店

(ささき みずえ・武蔵野大学名誉教授)